

氏名（本籍地）	荻 翔一（千葉県）		
学位の種類	博士（社会学）		
報告・学位記番号	甲第 466 号（甲（社）第 41 号）		
学位記授与の日付	2020 年 3 月 25 日		
学位記授与の要件	本学学位規程第 3 条第 1 項該当		
学位論文題目	在日コリアン教会の歴史的展開に関する社会学的研究 —エスニック・チャーチの継承／変容に注目して—		
論文審査委員	主査	教授	博士（社会学） 高橋 典史
	副査	教授	博士（社会学） 山本 須美子
	副査	教授	博士（人文科学） 宇都宮 京子
	副査	北海道大学教授 博士（文学） 櫻井 義秀	

# 学位論文審査結果報告書〔甲〕

## 【論文審査】

荻翔一氏の学位請求論文「在日コリアン教会の歴史的展開に関する社会学的研究—エスニック・チャーチの継承／変容に注目して—」は、戦前から戦後にかけて在日コリアンが中心となって各地に創設されたプロテスタント教会（本論文では「在日コリアン教会」と表記している）を研究対象とし、大阪、広島、東京という複数の都市に所在する諸教会における丹念なフィールドワークの成果にもとづいて、それらの教会の歴史的展開を宗教社会学的な視点から分析し、その変容パターンを析出したものである。そして、とくに 1980 年代以降の韓国系ニューカマーを中心とする新参の信者たちの急増が、各教会の組織運営のあり方に与えた影響に着目している。

序章では、広範な先行研究のレビューを通じて、本論文の研究目的、分析視点、研究の方法等が説明されている。在日コリアン教会の歴史的展開について、「エスニック・チャーチ」としての継承／変容の視点から考察することを示したうえで、①終戦後から 1970 年代までの歴史的展開の解明、②韓国系ニューカマーが急増する 1980 年代以降の教会の対応策（組織マネジメント）がもたらした変容パターンの析出、③変容パターンに影響を与えた組織マネジメントの規定要因の考察、という本論文の 3 つの研究課題を挙げる。そして、組織マネジメントの規定要因として、長老制という教会政治制度に起因する牧師 - 長老間の力関係のグラデーションと教会の所在地の地域的なコンテクストという、教会の内外の 2 つの要因を仮説的に提示したうえで、終章において検証することが述べられている。

第 1 章、第 2 章では、本論文の研究上の背景が詳述されている。

第 1 章は、まず 1910 年の日韓併合以降の朝鮮からの人々の移住と在日コリアン社会の形成・変容が説明される。終戦後の人口減少や朝鮮半島の動乱から大きな影響を受けつつも、在日コリアンたちは各地にエスニック・コミュニティを形成していった。だが、時が経つにつれて世代交代の進展、帰化や国際結婚の増加などにより、在日コリアン社会の多様化が進行してきた。さらに、1980 年代以降の韓国系ニューカマーの急増が、新旧のコリアンという 2 つの異なる社会を創出したとしている。

第 2 章では、朝鮮半島におけるキリスト教（とくにプロテスタント）の歴史的展開が説明される。プロテスタントの布教は李氏王朝の時代から始まっていたものの、戦前における信者の規模は人口比ではわずか数%のマイノリティ集団であった。戦後の韓国社会においてキリスト教（プロテスタント）が爆発的に急増するのは、1960 年代以降のことであり、その背景には都市化にともなう社会変動があったことを先行研究の知見から指摘している。韓国で伸長した新たな宗教様式（韓国キリスト教的な宗教様式）を有するキリスト教の波は、海外布教を通じて世界各地に広がり、隣国日本の在日コリアン教会にも影響を及ぼしてきたという。

第 3 章、第 4 章では、在日コリアン教会の主流派である在日大韓基督教会の歴史的展開が取り上げられている。

第 3 章では、教団や教会が発行した資料についての文献調査の成果から、とくに終戦後の再建過程を詳述している。戦時下において日本の教会への編入を余儀なくされた在日大韓基督教会は、戦後は在日同胞のための教会を目指した。しかしながら、1948 年の朝鮮半島の南北分断に大きく翻弄される。戦後、苦しい運営状況にあった各地の教会は、在日本大韓国民団（民団）の支援を受けるケースが少なくなく、その結果、在日本朝鮮人総联合会（総連）の関係者の教会離れを招いたという。そのため、在日大韓基督教会は、民団との関係の中で在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしてスムーズに

復興できた一方で、在日同胞のための教会という当初の理念を果たすことが困難になっていった点が指摘されている。

第4章は、日本最大の在日コリアン集住地域である大阪市生野区に所在する、在日大韓基督教大阪教会の現代のコミュニティ活動の事例研究である。同地域に暮らす在日コリアン高齢者たちは、法的地位、識字率、経済力などの諸問題により、社会保障や福祉サービスを十分に受けることに困難を抱えがちである。そのため、在日大韓基督教大阪教会では地域の高齢者向けの「老人大学」という福祉活動を行ってきた。2004年から開始されたこの福祉活動は、サービス利用者の国籍や信仰を問わないものではあるものの、利用者の大半は在日コリアンであり、その活動をボランティアとして支えているのが、韓国系ニューカマー信者たちである。この地域福祉活動は、現在の在日大韓基督教会が抱える多様なマイノリティを包摂する理念に即したものであるが、主として在日コリアンに向けたサービスになっている。そのため、在日大韓基督教大阪教会の組織マネジメントは、エスニック・チャーチとしての性格を部分的に維持しつつも、その対象を他にも広げているものであると論じている。

第5章、第6章では、ホーリネス信仰を核に持つ在日コリアン教会である在日ホーリネス教会が取り上げられている。

第5章では、在日ホーリネス教会の戦後の再建過程を明らかにしている。戦前、朝鮮半島から渡日した宣教師たちにより、各地に在日ホーリネス教会が設立された。しかしながら、戦時下のホーリネスに対する弾圧により、ほとんどの教会が解散または他の教会へ編入させられてしまった。そのため、戦後、自力での再建が困難であったことから、ホーリネス信仰を有する在日コリアンたちは、超教派の在日大韓基督教会のもとで活動する傾向が見られた。そして、東京、大阪、広島などの諸教会の事例を取り上げて、それらは在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして活動を存続していったと指摘している。

第6章では、在日ホーリネス教会として戦後に再建された広島第一教会の1980年代以降の組織マネジメントの特徴を考察している。在日コリアンの集住地域の1つである広島市に所在する同教会は、在日コリアンを中心とする教会であったが、1980年代以降、韓国から牧師が派遣されるようになり、かつ近隣に韓国系ニューカマー向けの教会がほとんどないことから、韓国系ニューカマー信者たちが集うようになった。その結果、広島第一教会は、在日コリアンのための教会という方向性から離れて、韓国系ニューカマーの参加および日本における宣教をめざす組織マネジメントを採るようになっていったことが指摘されている。

第7章、第8章、補論では、在日コリアンの集住地域が存在する東京都荒川区にある東京福音教会が取り上げられている。

第7章は、東京福音教会の歴史的展開をとくに戦後の再建過程に注目して明らかにしている。1924年にアメリカ人宣教師によって創設された同教会は、戦時下においては日本の教会への編入を余儀なくされた。戦後は、在日大韓基督教会への合併を選んだものの、他方でアメリカ人宣教師を引き継いだ海外宣教団体からも支援を受けた。だが、エスニック・チャーチとしての活動を望む在日コリアン信者たちの意向もあり、1960年に宣教団体から自立した単立教会となる。その後は、在日コリアンの次世代への信仰継承などに取り組んでいったことから、組織マネジメントとしては、在日コリアンのための教会としての機能・役割を維持しようとしてきたと指摘している。

第8章では、東京福音教会の1980年代以降の組織マネジメントの特徴が考察されている。宣教団体からの独立以降、同教会では一貫して長老が教会運営のイニシアティブを握っており、牧師は教会に雇われる形態をとってきた。在日コリアン二世の教会離れが進んできた一方で、1980年代以降になると、

韓国から赴任する牧師たちの存在もあり、韓国系ニューカマー信者が急増していった。ただし、それは在日コリアンの長老のリーダーシップを揺るがすものではなく、東京福音教会はあくまでも在日コリアンたちを最優先しつつ、その方針に反さない範囲内で韓国系ニューカマーたちのニーズにも対応するという、重層的な構造をもつ組織マネジメントを採ってきたことを指摘している。

補論では、東京福音教会へ通う韓国系ニューカマー女性と日本人男性の国際結婚カップルを取り上げて、近年の教会が提供する宗教的プログラムがこうした夫婦の信仰に及ぼす影響を考察している。そして、日本語話者向けのプログラムの数々が、日本人夫の教会活動への参加を促し、韓国系ニューカマー妻の信仰に対する姿勢を目標とするようになっていった一方で、それゆえに、教会の状況に不満をもった妻の意向に従って夫も教会を離れるといった事例も発生したことを明らかにしている。

終章においては、各章の内容を要約したうえで、超教派の在日大韓基督教大阪教会、ホーリネス系の広島第一教会、単立の東京福音教会の3つの事例について、韓国系ニューカマー信者の急増する1980年代以降の組織マネジメントの特徴の考察から、各教会のエスニック・チャーチとしての変容パターン（在日大韓基督教大阪教会＝「拡張型」、広島第一教会＝「変質型」、東京福音教会＝「重層型」）を析出している。そして、変容パターンの規定要因としての序章で仮説的に提示した、長老制という教会制度に起因する牧師－長老間の力関係のグラデーションと教会の所在地の地域的なコンテクストの影響を検証し、その妥当性を示した。

次に審査委員会および口述試験を通じて明らかになった、本論文の成果と問題点を報告する。まず本論文の成果としては、以下の3点が挙げられる。

第一に、在日コリアン教会に関する研究史における意義である。これまでの在日コリアン教会についての先行研究は、在日大韓基督教会が中心であり、それ以外の教会を含んだ包括的な成果は提出されてこなかった。本論文は、異なるタイプの複数の在日コリアン教会の戦後の展開と現代の変容について、社会学の立場から、①在日コリアンのためのエスニック・チャーチの形成、②在日コリアンの世代間の信仰継承、③1980年代以降の韓国系ニューカマーの増加、④在日コリアン信者とニューカマー信者の関係性といった点に注目して明らかにしたことは、学術的意義がきわめて大きい。

第二に、移民と宗教をめぐる研究分野における意義である。本論文は、ニューカマー偏重の研究動向にあってオールドカマーの宗教に着目した研究成果として貴重であり、かつ教会内における新旧のコリアン信者の関係性を研究対象とした点も高く評価できる。また、エスニック・コミュニティにおいて主流ではないマイノリティの宗教集団に注目することにより、儒教、シャーマニズム、キリスト教、その他の諸宗教が混在する在日コリアン社会の宗教文化の多元性の一端を明らかにした点も重要である。

第三に、長期にわたるフィールドワークを通じて収集した諸資料の学術的価値である。大阪、広島、東京の在日コリアン教会を訪問し、各教会の歴史に関する貴重な資料を入手できたことは、今後の研究のさらなる展開につながるものであり、高く評価できる。

以上のように、本論文は、在日コリアン教会についての研究のみならず、現代日本における移民と宗教に関する研究等の分野に対しても、新たな知見を提供する優れた研究成果である。ただしその一方で、本論文に関しては下記の3点のような問題も指摘できる。

第一に、本論文の研究史上の位置づけに関する問題である。本論文は、エスニック・チャーチとしての在日コリアン教会研究や在日コリアンのエスニシティ研究など、数多くの研究分野に関わるものであり、論文中では多岐にわたる先行研究について言及がなされている。しかしながら、宗教社会学などの

大きな研究分野における本論文の学術的意義が、序章や終章で十分に展開されていないために、著者の想定している研究成果の射程が非常に狭い印象を受ける。それゆえ、本論文の学術的意義を、在日コリアンのエスニック・チャーチ研究のみならず、より広い視点からも説明することが求められる。

第二に、本論文における信者たちの信仰生活が、教会組織の分析ほど厚い記述になっていないという問題である。本論文が在日コリアン教会の維持・継承にとって重要な課題であった次世代の信仰継承に注目している以上、信者たちの実態に関してより細やかに論じる必要があっただろう。

第三に、本論文が対象とする在日コリアン教会の日韓の宗教史上の位置づけの問題である。本論文は、在日コリアン教会のエスニック・チャーチとしての役割に注目しているが、他方で在日コリアン教会は日韓のキリスト教界において、決して小さくない存在感を有してきた。それゆえ、在日コリアン社会の外側の日本社会や韓国社会における教会の社会的役割を考察することも、在日コリアン教会研究に求められる研究課題であろう。

もっともこれらの問題点は、著者の今後のさらなる研究の展開に向けての指摘であり、本論文の研究成果の学術的価値を損なうものではない。本論文の研究史を踏まえた研究目的の設定、長期にわたる地道なフィールドワークにもとづく数多く資料の収集、記述の論理的整合性、理論的な考察といった諸点は、いずれも博士論文としての水準を十分に満たすものであり、その成果は在日コリアン教会に関する研究を大きく前進させるものとして高く評価できる。

#### 【審査結果】

上述のように、荻翔一氏の学位請求論文「在日コリアン教会の歴史的展開に関する社会学的研究—エスニック・チャーチの継承／変容に注目して—」は非常に優れた研究であり、社会学研究科（社会学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。よって、本審査委員会は、荻翔一氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。